

# 西川町バイオマス産業都市構想



令和5年12月

山形県西川町

## はじめに

西川町バイオマス産業都市構想の策定にあたり、一言御挨拶を申し上げます。

本町は、山形県のほぼ中央、県都山形市の西方 32km に位置し、東北の名峰月山の麓に広がる町です。町域のほとんどが森林で占められ、町内には清流日本一と名高い寒河江川が流れるなど、豊かな大自然に囲まれており、東北の里山ならではの四季の移ろいを感じることができる町です。また、県内でも有数の豪雪地帯のため、日本一遅くまで滑走可能な月山スキー場のある町として知られています。

本町には、山林整備で発生する間伐材、観光地の飲食店、旅館等から排出される食品残さ等の多種多様なバイオマス資源が賦存しています。今後、これらバイオマス資源を有効活用し、国連が提唱する持続可能な開発目標（SDGs）に積極的に取り組むとともに、近年頻発する台風やゲリラ豪雨等の自然災害に強い町づくりを目指すため、この度西川町バイオマス産業都市構想を策定することといたしました。

本町は「いぐだい すむだい してみっだい」～ from Nishikawa to the world ～という基本理念を掲げる「第7次西川町総合計画」を、町民の意見を最大限汲み上げながら策定しました。同計画では、「8年以内に生産年齢人口増加に向けて、できるだけ早く町民と多様な取組において協働し、町外の方から共感を持っていただける町となる」ことを目指すべき将来像として掲げています。

この将来像を目指す一環として、同計画では、森林活用を進める間伐材を活用した木質バイオマス発電所の整備や、公共施設への再生可能エネルギーの導入等が主要事業として位置付けられておりますが、これらの事業を、本構想を通じて具体化し、農林（農業・林業）の連携による地域資源循環型の町づくりを推進していく所存です。

結びに、本構想を策定するにあたり、関係する皆様から多くのご協力とご助言を賜りましたことに対しまして、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。



令和5年12月 西川町長 菅野 大志

## 目 次

### はじめに

1	地域の概要	
1.1	対象地域の範囲	1
1.2	作成主体	1
1.3	社会的特色	2
1.3.1	歴史・沿革	2
1.3.2	人口	2
1.4	地理的特色	3
1.4.1	地勢	3
1.4.2	交通体系	3
1.4.3	気候	4
1.4.4	面積	5
1.5	経済的特色	5
1.5.1	耕種農業・畜産農業	7
1.5.2	林業	8
1.6	再生可能エネルギー利用の取組	9
2	地域のバイオマス利用の現状と課題	
2.1	地域のバイオマス利活用方法	10
2.2	地域のバイオマス賦存量および現在の利用状況	10
2.3	バイオマス利用状況および課題	11
3	目指すべき将来像と目標	
3.1	目指すべき将来像	12
3.2	達成すべき目標	14
3.2.1	計画期間	14
3.2.2	バイオマス利用目標	14
4	事業化プロジェクト	
4.1	基本方針	15
4.2	再生可能資源産業エリアでの木材加工・熱利用プロジェクト	16
4.3	木質バイオマス利用設備の面的展開プロジェクト	18
5	地域波及効果	
5.1	経済波及効果	20
5.2	雇用創出効果	21
5.3	その他の波及効果	21
6	実施体制とフォローアップ	
6.1	構想の推進体制	22
7	フォローアップの方法	
7.1	進捗状況の管理	23
7.2	中間評価と期中評価	24
8	他の地域構想との有機的連携	25

# 1 地域の概要

## 1.1 対象地域の範囲

本町は、山形県のほぼ中央に位置し、県庁所在地である山形市の西方 32km に位置する。磐梯朝日国立公園の朝日連峰や月山とその支脈に囲まれており、総面積の約 90%が山地で、平地は町を流れる寒河江川沿いと、その支流沿いにわずかに広がっており、可住地面積は 12.55 km<sup>2</sup> (3.2%) にすぎない。



図1 西川町位置図

## 1.2 作成主体

本構想の作成主体は、山形県西川町等とする。

## 1.3 社会的特色

### 1.3.1 歴史・沿革

本町の起源は、発掘された出土品から旧石器時代と言われている。また、月山・湯殿山・羽黒山の出羽三山の山岳宗教を拠点に、本道寺・大日寺・日月寺などの寺院を中心とした宗教集落であり、出羽三山参詣の主要道路であった六十里越街道の宿場として発達した。当時の村数は22村で、明治8年から9年に16村、明治22年の町村制施行で西山・川土居・本道寺・大井沢の4村に、そして、昭和29年10月1日にこの4村が合併し、現在の西川町となった。

町名は、西山村、川土居村の両村が設置した西川中学校組合の名称に由来する。

### 1.3.2 人口

人口は、昭和30年の15,260人をピークに減少し、平成17年には6,917人と半減している。2014年（平成26年4月）には人口6,081人・高齢化率38.04%となっていたものが、2023年（令和5年4月）現在で人口4,732人・高齢化率47.34%となっている。年間出生数も平成26年の47人/年から令和4年は10人/年となり、人口減少と少子化の影響から、人口減少克服は本町の最大の課題である。

表1 本町の人口推計・目標

区分	2020年	2022年	2024年	2026年	2028年	2030年
	令和2年	令和4年	令和6年	令和8年	令和10年	令和12年
男人口	2,449	2,341	2,264	2,187	2,089	2,031
女人口	2,688	2,520	2,388	2,257	2,157	2,054
総人口	5,187	4,861	4,652	4,444	4,246	4,085
0～14歳	444	376	325	294	273	248
15～64歳	2,229	2,228	2,143	2,052	1,925	1,835
65歳～	2,314	2,257	2,184	2,098	2,048	2,002
高齢化比率	44.6	46.4	47	47.2	48.2	49
若年者比率	9.8	9.4	10.1	10.2	9.9	10
世帯数	1,847	1,798	1,785	1,759	1,733	1,709

国は、平成26年12月にまち・ひと・しごと創生「長期ビジョン」および「総合戦略」「基本方針」の制定に基づき、急速な少子高齢化の進展に対応し、日本全体、特に地方の人口減少に歯止めをかけるとともに、東京圏への人口の過度の集中を是正し、それぞれの地域で住みよい環境を確保して、将来にわたって活力ある日本社会を維持していくことを目指している。

このような背景から、本町は、**第7次西川町総合計画**で、「8年以内に生産年齢人口増加に向けて、できるだけ早く町民と多様な取組において協働し、町外の方から共感を持っていただける町となる」ことを目指すこととしている。

## 1.4 地理的特色

### 1.4.1 地勢

本町は、山形県のほぼ中央に位置し、磐梯朝日国立公園の朝日連峰や町のシンボルである月山とその支脈に囲まれており、天然の山菜・きのこ等が豊富に採取でき、山の恵みを利用した食文化が培われている。総面積は 393 ㎢と広大だが約 90%は山林で、その他は町を貫流する寒河江川沿いとその支流沿いの平地になっている。気候は典型的な日本海型気候で、積雪は町の中心地でも 1.5mから 2.0m、山間部では 6.0mにも達する県内有数の豪雪地帯で、多い地区では6.0mを超える積雪がある。町のシンボルでもある月山では春、夏スキーを楽しむことができ、令和元年には、4月上旬から7月下旬までの間、約 14 万人のスキーヤーやスノーボーダーが訪れ賑わいを見せている。

### 1.4.2 交通体系

交通は、町を横断する東北横断自動車道酒田線は、平成 10 年度に寒河江 IC から西川 IC まで、平成 11 年度に西川 IC から月山 IC まで、平成 12 年度に湯殿山 IC から庄内あさひ IC まで、平成 13 年度には酒田みなと IC までの区間が開通し、町内にはインターチェンジが 2 箇所設置され、山形市まで約 30 分、仙台市までが約 1 時間 15 分と飛躍的に時間短縮が図られ、町民の行動範囲の拡大、生活の利便性が向上している。



図 2 交通体系

また、基幹道路である国道 112 号が町の中央を東西に走り、内陸と庄内を結ぶ交通の要所となっている。町内の道路網は、この国道を基点に県道および町道が肋骨状に整備され、県道・町道の整備も進み、基本的な生活道路は確保されている状況にある。なお、冬期間の除雪は、早朝完全除雪体制によりほぼ完全に実施されており、現在の除雪延長は 160.3 km となっている。

### 1.4.3 気候

本町の気候は、豪雪に特徴づけられる。気象庁の観測データによると、1～3月の最深積雪は2mを超えているが、気象庁の観測点のない地区の積雪まで目を向けると、2013年には志津地区で6.04mの積雪がみられている。

年間平均気温は8.9℃であるが、1月、2月の平均気温は氷点下となるなど寒さが厳しい。また、冬季の積雪とも関連するが、冬季に日照時間が短くなる傾向にあり、1月の日照時間は26.4時間となっている（日照時間が最も長いのは5月（195.9時間）、年間の日照時間は1263.7時間）。

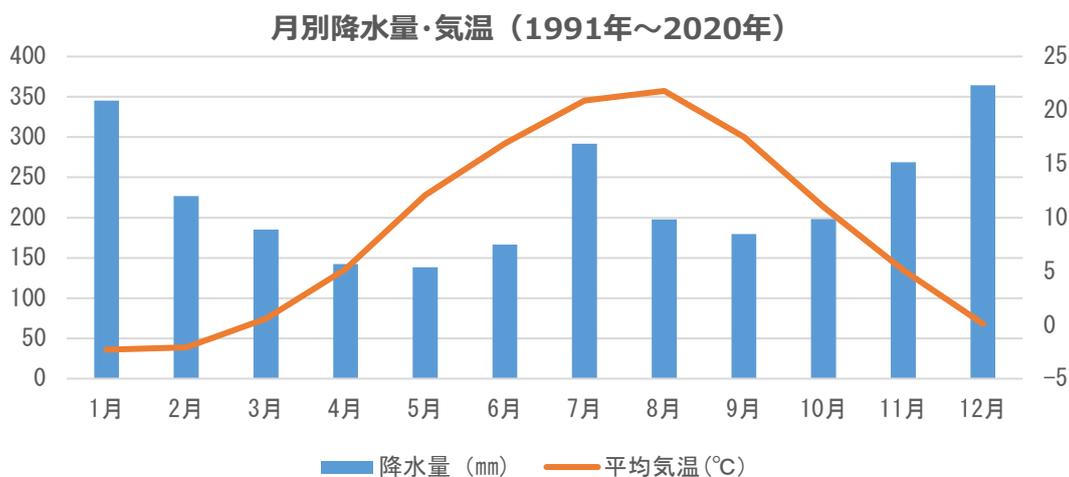


図3 気候



図4 積雪状況

※積雪量（8m）

昭和48年3月1日観測